

活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

自分の一歩 みんなの一歩 校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年9月29日

No.55(合同No20)

校長 野口 邦彦

東京2020オリパラに思う⑤

日本のすばらしさを、世界に向け

日本人アスリートの活躍が目覚ましかった今大会、しかし、それ以上に外国の皆さんに称賛されたのが、様々な場面で活躍するボランティアの皆さんです。コロナ対策や無観客の中で、事前に予定されていた活動とは違ってしまったボランティア、選手がバブル方式の缶詰め状態の中でも、少しでも日本の文化に触れてもらおうと工夫されていたということが、帰国後の選手からのSNSで発信されています。例えば、選手村やメディアセンターには、左のような折り紙が置かれており、選手や記者たちへの細やかなプレゼントとして好評を得ていたとのこと。また、各施設では選手たちに気持ちよく過ごしてもらい、自分達の力を発揮してもらおうと清掃の徹底や笑顔でのお出迎えなど、日本のすばらしさを、選手たちがとても喜んでいただけたとのこと。

日本人の「思いやり」と「おもてなし」の心が、色々な所に



こんな工夫も



大会当初は「おもてなし」ということが今大会のコンセプトにありましたが、実際にはコロナ対応に追われてしまった今大会、そんな中でもボランティアの皆さんは、上（本部）から指示されたわけでもなく、自分達で自主的に動いてくれたことに、なお一層価値があるのだと思います。

自然災害の時も、パニックにならずみんなで協力し合う姿勢、そして、今大会パンデミックの中でのオリンピック・パラリンピック、異例の事態の中で、あらためて感じる日本人

のすばらしさ。帰国した外国の皆さんの感謝のSNSにより、日本のすばらしさを再発見できた出来事でした。

「アスリートファースト」と言われた今大会、しかし、オリパラと言う大きな大会を作っているのはアスリートだけではありません。それを影で支える人たちがたくさんいます。日本人選手のメダルに沸いた今大会ですが、本当の意味でのメダリストは、こういったボランティアの人達なのだと思います。

その反面、こういった悲しい出来事も

大会期間中、オリパラのボランティアユニフォームを着た人達を街中でたくさん見かけました。賛否両論あった今大会、特に反対の人達がボランティアの皆さんに罵声を浴びせるという出来事もありました。電車等で出会っても、上着など羽織って、何か申し訳なさそうに会場に向かうボランティアの人達を見かけました。大会に対して賛否があるのは仕方ないと思います。しかし、だからといってボランティアさんにこういう気持ちにさせてしまうのは、何か違うのではないのでしょうか

最後まで笑顔とおもてなしの心で

